

『#テロ』（フェルディナント・フォン・シーラッハ著）を読んでみた。前回の『#神』に続いての法廷劇である。

2013年7月26日、ドイツ上空で旅客機がハイジャックされたという設定。テロリストがサッカースタジアムに旅客機を墜落させ、7万人の観客を殺害しようとするのだ。しかし緊急発進した空軍少佐が独断で旅客機を撃墜する。乗客は164人。スタジアムには7万人。撃墜されると164人の死者が出る。撃墜しなければ7万人+164人の死者となる。一般人が審議に参加する参審裁判所に委ねられた。検察官の論告、弁護人の最終弁論の後に、本書では空軍少佐が有罪かまたは無罪かの二つの判決が用意されている。どちらの判決を下すかは、読者に委ねられている。

付録として、テロリストの襲撃を受け12人の犠牲者をだした「シャルリー・エブド」誌がMサンスーシ・メディア賞を授与された際の著者による記念スピーチ「是非ともつづけよう」を併録している。

裁判の中で、トロッコ問題についても言及している。「ある人を助けるために他の人を犠牲にするのは許されるか」について。線路を走っていたトロッコ（電車）が制御不能になった。このままでは、前方の作業員5人が轢き殺されてしまう。この時、たまたまAは線路の切り替え装置のすぐ側にいたとする。Aがトロッコの進路を切り替えれば5人は確実に助かる。しかし切り替えられてしまう別路線でもBが1人で作業しており、5人の代わりにBがトロッコに轢かれて確実に死ぬ。Aはトロッコを別路線に引き込むべきか。単純化すれば「5人を助けるために他の1人を殺してよいか」という問題である。トロッコ問題に似た歩道橋問題があるそうだ。この問題では、1人を上から線路上につき落として障害物にすれば、トロッコは確実に止まり5人が助かる時、突き落とすかどうかを問うものである。

このような決断には倫理的側面が絡んでくる。最近、様々な領域でAIが判断に用いられるようになり、省力化と正確性を謳って持てはやされている。確かに、病理診断においては膨大なデータを読み込ませることで正確性は向上するだろう。だが倫理が絡んだ問題の判断は難しいだろう（問題を引き起こしかねない）。AIは膨大なデータを読み込んで統計的思考で判断を下す。AIが制御する自動運転車においても、トロッコ問題に遭遇した時、衝突が避けられない状況でAIの判断基準をどのように設計する（どんなデータを読み込ませる）かという問題とも関連してくるのである。現在の世界情勢からゆくと、イ

スラエル（ロシア）で設計された自動運転装置は、間違いなく 5 人のアラブ人（ウクライナ人）を殺してでも自国民を救うのだろうか。